

■調査項目

U I J ターン者を増やす取り組みについて

・調査期日

平成27年11月16日(月)午後1時30分～午後5時30分

・調査内容

U I J ターン者で全国的に名を馳した島根県海士町は、平成の大合併方針に背を向け、山内町長を中心に「若者」、「馬鹿者」、「よそ者」がいれば町は動くという信念の下、地理的、地勢的条件があつたが故もあり、町単独で生き残る道を選んだそうです。

約800年前「承久の変」により、後鳥羽上皇が配流された島として有名ですが、本土から60km離れ、フェリーで3時間半位かかる、正に日本海にある孤島で人口も、かつては7,000人の人口だったのが2,500人と激減した超過疎の町となっていた。フェリーで正午頃到着し、観光協会の女性(銭谷さん)の出迎えを受けた。早速「民間でやれることは民間に」の精神を実感した。

視察資料も有料との事で、納得理解しました。昼食後、島内の視察を行いました。タクシーの利用で少しでも地元にお金が廻るようにとの配慮のようでした。車で移動していて、子供の姿がやたら目につきましたが、移住者が200人程いて、ほとんどの家族が、1人2人と余分に子供を産んでくれるとの事で、余程気持ちの面での落ち着きがあるのだなと感じました。

町内(島内)視察の後、公民館で役場の大江課長の説明を受けましたが、U I J ターン者は資金をはじめ何も持たない人がほとんどであり、住居、仕事の手当て、生活資金の保証を心配のないよう手当てをする事から始めて、年を目途に独立を目指せるよう配慮していること、国の助成制度の活用を積極的に行う事、地場商品を掘り起こし、新規開拓し(隠岐牛、岩ガキ養殖、冷凍庫の設置)、東京市場へ出荷し、実を上げる。コンサルタントを使わず、独自で考える。役場の対外信用性、信頼性をフル活用し支援する等、町職員が一丸となって積極的に且つ発想の転換を図りながら、前向きに常に前向きに取り組んでいる。

もう1つ、島(町)の活性化にとって、多大な役割を果たしていることは、隠岐地区にあって唯一の高校である島根県立島前高校を発展再生した事に尽きると思います。

一学年の生徒数が15人を割り込み、県教委は廃校の意向に傾いていた状態にまで至っていたところから「学校がなくなれば益々若い者が本土に渡り、島の火が消える」という危機感から「高校を商品として売り出す」という発想に切り替え、全国に「島留学生」の呼び込みに力を入れ、その結果島外の遠くは東京・北海道の地より高校生が学びにやってくる、今では一学級60人前後の

生徒数となっている。当然、一学年2クラス体制となり、教員の1人もそれに伴って配置され島での居住者が増え、活気が生まれてきている。海士町の取り組みは、国の政策にも反映され、総務省の「ふるさと応援隊」制度につながっている。やる気のある所（自治体）には、国も県も自然に目が向けられ、思わぬところで「ご褒美」が貰えることになる。大いに見習う必要があると思います。

大江課長さんに「島前高校を5年制にされたら」と進言しましたら「そんなことできるんですか」と大いに興味を持ってくださったようで、実現すれば益々若者の注目度も高まり、町（島）ももっと元気になるなど期待するところです。

「ないものはない」海士町に乾杯！！